



不精の悪魔

安岡章太郎



新潮社版



魔 惡 の 精 不^{しょう}

定価 390 円

昭和四十二年二月十日発行
昭和四十二年三月十日二刷

著 者 安岡章太郎

発行者 佐藤亮一

東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社新潮社

電話東京(260)一一一(大代)

振替東京八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします)

印刷・株式会社金羊社

© S. Yasuoka

製本・新栄社製本所

Printed in Japan

目 次

I

作家の眼……………九

文は人なり……………九

きのうときよう……………三

城と美容整形……………七

臭クサい臭ニオひ……………三

怒りについて……………五

ご対面……………元

現場の感覚……………三

玉手箱……………元

失敗とツマズキ……………四

毒を以て毒を制す		四七
デブの自尊心		五五
庄野潤三と知り合つたころ		六三
吉行淳之介		七五

Ⅱ

私のみたアメリカ		八五
アメリカ文壇瞥見記		一〇六
私小説の可能性		一二六
とらえがたい滑稽		一三三
不精の悪魔		一三七

新しい文学はマス・コミからは生れない……………一五

上品な文学・下品な文学……………一六

もどってきた退屈——漱石ブーム……………一七

作家の郷土——太宰治について……………一八

作家の日記について——荷風とジード……………一九

あとがき……………二五

装幀 田村義也

不
精
の
悪
魔

I

作家の眼

文は人なり

英語——には限らないだろうが——の文章を書くのは、非常にムツかしいらしい。勿論、私自身は英文で簡単な手紙一つ書くことができず「英語の手紙を書かねばならぬ」と考えるだけでも、長篇小説を書き下せといわれたときのような武者ぶるいを生じるくらいだから、お話にならぬが、英語の専門家であり、しかも文章家として（日本語の）も、かなり名前の高いような人でさえ、英語で書いた文章は、英米人から見ると、まるで文章になっていない、というようなものにしかないという話だ。

どういう文章が英語的な英語なのか、私にはまるきりわからないが、こういう話をきくと何となく、なるほどなア、と思う。何年かまえ、サイデンスティッカー氏が私の短篇を英語に訳してくれたことがあり、それを読んで私は何度も頭をヒネってしまった。自分の考えたことを

英語であらわすと、どうしてこんなことになるのか、わからなくなる個所に、じつにしばしばぶつかったからである。しかし、そのサイデンスティッカー氏の文章こそ、真正正銘の英語の文章であって、仮に私が読んで即座に自分の文章だと納得のできるような翻訳があれば、それは英語的英語ではなくて日本語的英語の文章だということになるにちがいない。

文章というものは、それぐらい微妙で気むずかしいものであり、文章を書く人間は、自分に對しても、ひとに對しても、当然それにふさわしいキビシサをもつべきであろう。しかし、そう思いはじめると、いま自分の書いているこの文章は、果して文章といえるようなものか、どうかが不安になってくる。

實際、いま私たちは文章について、おかしなほど鈍感になり、自分の書くものにも他人の書くものにも寛容になりすぎているのではないだろうか。はやい話が、日本人の英文学者の文章家のかく英語の文章は、英米人が読んで読むにたえない奇妙なものだというのに、英米人の日本文学者の発表する日本語の文章を読んでも、私などすこしもヘンな感じがしない。ドナルド・キーン氏やヴィリエルモ氏などが日本の文学、あるいは文壇の事情などについて書いた日本語の文章を読んでも、舌足らずな感じなどすこしもしないばかりか、外国人がつづった日本文というようなことさえ、まるきり忘れてしまうほどだ。前記のサイデンスティッカー氏の日本文についても無論、同じことがいえる。キーン氏なり、ヴィリエルモ氏なり、サイデンスティッカー氏なりの名前をかくして読めば、それが外国人の書いたものだど気がつく人は、めったにいないだろう。……考えてみると、これはちよっとウス気味悪いようなことだ。われわれは

文章についてのキビシサを失っているというより、ことによると日本語の語感そのものを、すっかりダメにしてしまっているのかもしれないではないか。

私は何も、文章の国粹主義者になるつもりで、こんなことを言っているのではない。ただ言葉について、文章について、私なりにもっていいはずの自信がグラついていることを正直にのべているまでだ。

ところで今日、大江健三郎に会って同じことを話したら、大江は魯迅の書いた日本語の文章はおかしなものだ、と言う。

「魯迅ほどの人でさえ、そうなのだから、やっぱり外国語で書いた文章は、ヘンなものを書く方が普通なのでしょう」

そういう大江の貸してくれた魯迅選集の「SHAW と SHAW を見に来た人々を見る記」というのを読んでみた。

なるほど、これは少々タドタドしい文章だった。それに、どういう意図がかかっているかとはともかく、日本語として読むには読みにくい箇所も、しばしばある。たとえば、

「彼等は大概Sをこのまないから、私は往々自分の嫌う人に嫌われる人を善い人だと思ふときがある」

といった言い廻しがそうだ。文法的にも「彼等は大概Sをこのまないが」とすべきだろう。それに、これは意識的にやっていることでもあろうが、「である」調と、「です、あります」調とが混同して使われていて、その混同のさせ方が意識的にやったにしては、あまりウマくな

い。——たしかに、これなら魯迅の名前をかくして読んでも、日本語をふだん使いなれていない外国人の書いたものだということは、すぐにわかる。

しかし、それはそうとして魯迅の書いたものは、こんな文章を読んでも、じつに立派だし、それらしい魅力がある。

「Sは大食しない、或は始めの時に随分食ったかも知れません。中途箸を使い出した、大變下手、中々挟まれません。併し感心な事には段々巧みになって遂に何か一つをしつかりと挟みました。欣欣然と人々の顔を一まわり見ましたが、誰も注意しないからその偉い成功は私以外の誰れからも看過されてしまった」

これはバーナード・ショウが支那料理を食べている手つきの描写だが、何でもないようできて、やはり実にしつかりした何か一つのものを持っている。これを書いている魯迅の呼吸や顔つきまで、うかがえるような文章だ。

正直にいつて、前記三人のアメリカの日本文学研究家の文章はこの魯迅の文章とはくらべものにならないくらい上手な日本文だ。けれども、それを読みながら、その人の息づかいや顔の色が浮かんでくるといふようなことは、まるでなかった。この人たちの文章に喜怒哀楽の感情が出ていないというのではない。大体が論文調のもので、客観的な叙述をしているものだから、この魯迅の文章と比較することにも無理がある。ただ、それにしても魯迅の文章には、うまい、へた、を越えた或る人格的な魅力がそなわっていることはたしかだ。

文章には語学の要素が多く含まれるが、それだけではないということだろう。

きのうときよう

新送りガナについて、これは我が国字を将来ローマ字化そうとするための事前工作だという説がある。本当だろうか？ バクゼンたるローマ字論者である僕にとって、本当ならこれは慶賀すべきニュースだ。

大体、ローマ字国字論については賛成派と反対派とがきわめて明瞭に分れているようである。賛成論者は世界にもっとも広範囲に採用されている文字をはやく我が国でも採用すべきだと言うし、反対論者はハッキリとそれが不可能だと考えている。つまり安保条約改定その他の政治問題とちがって、これにはワカリマセンという回答の出る余地がほとんどない。これは問題が僕らの日常茶飯の事に直接かわっているからだろう。ところで僕の場合は子供のころから漢字をおぼえるのがたいへん苦が手であった。鹽だの鞆だのという字を一字書くだけでも非常に精力を消耗するようで、ましてそれをおぼえこむとなると一と晩も二た晩もかかったうえ、しばらくするとせっかくおぼえたものもすぐ忘れてしまう。いまでも国語の試験の前夜、カキトリの準備をはじめるときのことを想い出すと、それだけでも憂鬱である。これはたぶん僕

の頭の構造が複雑なためであろう。白い地図に曲りくねった川や鉄道の図を書き入れることも好きではなかったが、複雑な漢字のかたちを憶えこむことは、それに似た苦痛があった。楷書でさえそんなぐあいだから、くずし文字や変体ガナまですっかり習得している人を見ると、いまでも畏敬の念と奇異の感を抱いてしまうのだ。

旧カナ遣いの文法にも、漢字におとらず悩まされた。しかし、この方は同じ苦しむにしてもカキトリの練習とは大ぶ質のちがったものだ。文法をおぼえさせられる苦痛は、いくら変則的なものにしろ、何らかのスジミチが一本とおっており、それをたどって行けばシャニムニ記憶力だけにたよらなくとも、なんとか追いついて行けそうなどころがあった。ところが漢字ときては——これにもそれなりの法則や系統はあるのだろうか——まるで跳びまわるノミを一びき一びき、ツメの先でおさえこんで行くような努力が必要だ。こんなものが早くなくなってくれたら、どんなに助かるだろうと思った。

だから僕がローマ字論を支持するのは、自分の利己的な観点からであって他ではない。ローマ字が国字になれば日本の国がよくなり、文化が進歩するとか、外国人にも日本や日本人を理解させやすくなるとかは考えない。それに、本当のことを言えば、どうせ自分の生きている間には日本語がローマ字で書けるようになることは絶対にあるまいと確信しているのである。たとえ僕がどんなに漢字をきらい、これをおぼえこむことに苦痛を感じても、漢字なしでは僕ら是一日もやって行けないことは充分承知している。けれども、それだからますますローマ字（というか、表音記号）にアコがれることになるわけだ。こういうアコがれ方を自分ではまっ